

ふるさと安曇野 きのうきょうあした

No.2 2008.10.18

土の中から現れた安曇野



町田遺跡（安曇野市豊科田沢） 1号竪穴建物（SB1）の調査 発掘調査は土と対話しながら進められます。

私たちが当たり前のように目にする安曇野の景観、さらに私たちが身に付けた安曇野固有の生活習慣や文化は、実は長い年月をかけて築き上げられたり育まれてきたものです。私たちの恵まれた暮らしは、郷土の先人たちの努力や営みがあって、初めて成り立っていると言っても過言ではないでしょう。

先人たちの営みは、長い年月を経て土に埋まり遺跡となっています。文字による情報が限られている時代のことです。私たちは発掘調査という方法によって、かろうじてその一端を知ることができます。

安曇野市内でも、今までに数多くの発掘調査が行われてきました。そして、建物跡や出土した土器や石器など道具類によって、彼らの暮らしぶりが次第に明らかになってきました。そこには、大昔のことだけれど、今まで知られていなかった最新の安曇野の姿を発見することができます。

土の中から現れた安曇野。一緒に覗いてみましょう。



北村遺跡出土の土偶
（長野県立歴史館蔵）

◆◆安曇野の縄文時代◆◆

森のめぐみと縄文文化 今から1万数千年前に始まる縄文時代は、食料採集を基本とした時代でした。

安曇野に発見された縄文時代の遺跡の多くは縄文時代中期から後期のもので、他谷遺跡・離山遺跡（ともに穂高牧）、南松原遺跡・東小倉遺跡（ともに三郷小倉）、北村遺跡（明科光）、ほうろく屋敷遺跡（明科南陸郷）など、主に山麓に分布しています。

里山からは、食用とした木の実や動植物、さらに暮らしに欠かせない道具類の原料などを得ることができます。豊かな自然と共存し、そして個性豊かな縄文土器に代表される独自の文化を発展させた縄文人は、安曇野の「環境と最も上手につきあった」人たちなのかもしれません。



他谷遺跡復元図

山麓に立地し、建物が環状に配置される。中央は広場で掘立柱の建物が建つ。周囲には深い森が広がる。

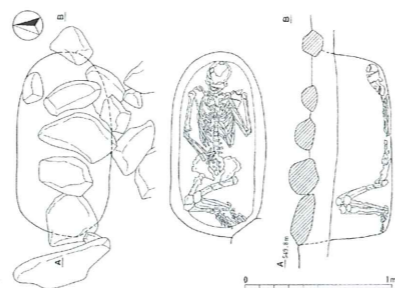
他谷遺跡の調査 他谷遺跡は、穂高牧の山麓、満願寺下を流れる川窪沢左岸にあります。平成11年から12年にかけて遺跡の一部が発掘され、縄文時代中期から後期（今から5000年～3000年ほど前）の竪穴建物（住居）45棟をはじめ多くの土器や石器などが見つかりました。

北村遺跡の調査 北村遺跡は、犀川の右岸段丘上、ちょうど長野自動車道が明科トンネルに入る手前にあります。昭和62年に行われた発掘調査で、竪穴建物（住居）50棟の他に、469基ものお墓と300体にもものぼる人骨が発見されて有名になりました。

北村人の食生活 北村遺跡から出土した人骨に含まれるたんぱく質（コラーゲン）を分析した結果、北村人の主要な食料はドングリやクルミなどの木の実やヤマノイモであったことが明らかに

なりました。出土した凹石や磨石、石皿などは木の実を割ったり粉砕するための道具と考えられます。

この他、遺跡からはイノシシやニホンジカなどの骨も出土しています。これら動物や犀川で獲った魚（遡上してきたサケなど）も食用にされていたことでしょう。



北村遺跡の墓址（SH859）実測図（『報告書』より）

縄文時代の祈り 縄文人が作ったさまざまな道具の中には、祈りのための道具と考えられるものがあります。食料を狩猟と採集に頼る縄文人にとって、自然をつかさどる神や精霊に対する信仰（祈りや感謝）は、精神生活の中で最も重要な位置を占めていたことでしょう。



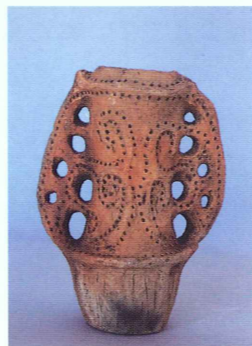
ほうろく屋敷遺跡出土の石棒（中央）

コラム① 土器の発明

土器は、適当な粘土を採取し、成形し、焼き上げることによって作ることができます。

土器の発明によって人の生活は大きく変化したと言われます。例えば煮炊きによって、それまでは食べにくかった自然物も食料として摂ることができるようになるなど、食生活が一段と豊かになりました。また、さまざまな用途に用いられるようになり、芸術的装飾を施したものも誕生しました。

縄文土器の造形と意匠からは、彼らの豊かな精神生活をうかがうことができます。



他谷遺跡出土縄文土器

◆◆安曇野の弥生時代◆◆

米作りのはじまり 大陸からもたらされた水稲耕作や金属器を中心とした文化は人々の生活を一変させました。弥生時代の始まりです。そしてこの変革は、その後の私たちの生活様式や価値観をも方向づけることとなりました。

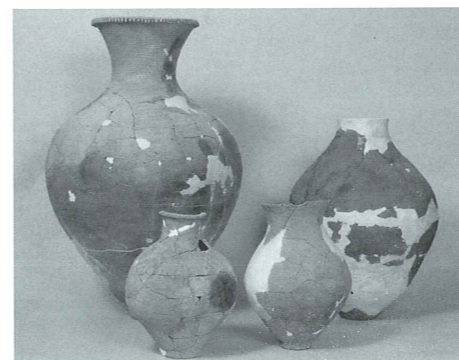
信州の弥生時代は、縄文時代の人々が水稲耕作を受容し定着させたことから始まります。

安曇野でもほうろく屋敷遺跡（明科南陸郷）、黒沢川右岸遺跡（三郷小倉）などで、再葬墓という新たな形式のお墓や糸を紡ぐための紡錘車などがみつかり、弥生文化波及を知ることができます。黒沢川右岸遺跡や緑ヶ丘遺跡（明科七貴）では、釉の痕がついた土器も出土しています。

その後、犀川右岸の町田遺跡（豊科田沢）など大きな集落も現れました。これらの遺跡は、安曇野の田園風景の原点といってよいでしょう。

ほうろく屋敷遺跡の調査 ほうろく屋敷遺跡は明科南陸郷の犀川左岸段丘上にあります。昭和63年・平成元年に行われた発掘調査で、縄文時代の竪穴建物や集石の他、弥生時代中期の集石やお墓（再葬墓）などがみつかり注目を集めました。

お墓に使われていた土器は、安曇野で最も古い弥生式土器の一つで、弥生文化波及を知る貴重な資料となっています。



ほうろく屋敷遺跡再葬墓出土の土器

コラム② 森の伐採

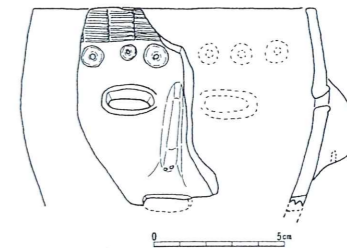
木は食用となる実を供給してくれるばかりでなく、建築部材としても重宝されました。日本では、縄文時代以来、建物は木で作られるなど、木のある暮らし・木の文化が定着していきます。

弥生時代には、伐採用の縦斧と加工用の横斧というように明確に機能分化した石斧のセットが登場します。やがて鉄斧も使われるようになりますが、こうした道具によって、縄文時代に比べて、森の伐採が格段に進んだと言われます。

安曇野の里山の景観も少なからず変わったことでしょう。

町田遺跡の調査 町田遺跡は豊科田沢の犀川右岸段丘上にあり、古くから土器や石器が出土することで知られていました。

平成10年、発掘調査が行われ、弥生時代中期後半の竪穴建物10棟と掘立柱建物3棟などが発見されました。石器には、稲の穂首を摘む石庖丁の他に、砂岩製の大型スクレイパーなど畑作に用いられたと考えられる石器（収穫具）が見つかり、町田遺跡出土の土器（『豊科町誌』より）人面が表現されている



町田遺跡出土の土器（『豊科町誌』より）人面が表現されている

町田遺跡の環境 堆積した粘土に含まれた花粉の分析など自然科学的調査によって、弥生時代の町田遺跡周辺ではヨシの茂る湿地がいくつか残り、段丘上から背後の山にかけてはコナラ・クリなどの落葉広葉樹やモミ・ツガなど針葉樹からなる林が広がっていたことがわかりました。

段丘下、田沢川が犀川と合流するあたりにできた湿地で稲作を、段丘上では畑作を行っていたと考えられます。食膳にはコメの他に採集した木の実、犀川で獲った魚や山で獲った小動物などが並んだことでしょう。



町田遺跡復元図



石斧のセット（町田遺跡出土）

◆◆安曇野市内の主な遺跡◆◆



豊科田沢(東山)出土の石鏃



他谷遺跡出土の土偶



チンクラ屋敷遺跡出土の四頭石斧



ほうろく屋敷遺跡調査風景



町田遺跡の掘立柱建物(柱穴に立つ)



上原古墳



潮神明宮前8号古墳石室出土玉類



明科廃寺出土瓦

参考文献(主な市内遺跡発掘調査報告書)

- 豊科町教育委員会 1987 『菖蒲平窯跡群-77kv安曇野作業所送電線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-』
- 長野県埋蔵文化財センター 1989 『上手木戸遺跡-中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書10(松本市内その7・豊科町内)-』
- 豊科町教育委員会 1992 『吉野町館跡遺跡-県営ほ場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-』
- 豊科町教育委員会 1993 『梶海渡遺跡-県営ほ場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-』
- 豊科町教育委員会 1994 『鳥羽館跡遺跡-県営ほ場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-』
- 豊科町教育委員会 1999 『町田遺跡-都市対策砂防事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-』
- 豊科町東山遺跡調査会・豊科町教育委員会 1999 『筑摩東山+上ノ山・菖蒲平窯跡群発掘調査報告書-』
- 穂高町教育委員会 1970 『穂高町の古墳』
- 穂高町教育委員会 1972 『離山遺跡-長野県南安曇郡穂高町離山遺跡発掘報告書-』
- 穂高町教育委員会 1987 『矢原遺跡群(馬場街道遺跡)-県道柏矢町~田沢停線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告』
- 長野県埋蔵文化財センター 1996 『国営アルプス安曇野公園埋蔵文化財発掘調査報告書1-穂高古墳群-』
- 穂高町教育委員会 2001 『穂高町他谷遺跡-県営中山間総合整備事業あづみ野地区に伴う緊急発掘調査報告書-』
- 穂高町教育委員会 2001 『穂高町 一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡 穂高沢水系による開発・上原古墳-担い手育成基盤整備事業穂高西部地区に伴う発掘調査報告書-』
- 三郷村教育委員会 1988 『黒沢川右岸遺跡』
- 三郷村教育委員会 1995 『東小倉遺跡』
- 三郷村教育委員会 1997 『東小倉遺跡-県道側溝工事に伴う工事立会調査報告書-』
- 三郷村教育委員会 1999 『三郷村埋蔵文化財(資料集)』
- 三郷村教育委員会 2003 『東小倉遺跡Ⅲ-下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』
- 三郷村教育委員会 2005 『東小倉遺跡Ⅳ-公共下水道工事・集落道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書-』
- 長野県埋蔵文化財センター 2005 『三角原遺跡-安曇野水利事業あづみ野排水路埋蔵文化財発掘調査報告書(三郷村内)-』
- 安曇野市教育委員会 2006 『東小倉遺跡Ⅴ-県道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書-』
- 明科町教育委員会 1979 『長野県東筑摩郡明科町こや城遺跡発掘調査報告書』
- 明科町教育委員会 1991 『ほうろく屋敷遺跡-川西地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書-』
- 長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター 1993 『北村遺跡-中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11(明科町内)-』
- 明科町教育委員会 1994 『明科町の遺跡-長野県東筑摩郡明科町遺跡詳細分布調査報告書-』
- 明科町教育委員会 1995 『上生野遺跡-生野地区農村基盤総合整備事業に伴う緊急発掘』
- 明科町教育委員会 1997 『塩田岩宮遺跡』
- 明科町教育委員会 2000 『明科廃寺址-個人住宅建替に伴う緊急発掘調査報告書-』
- 明科町教育委員会 2001 『ほうろく屋敷遺跡Ⅳ-個人住宅建築工事に伴う第4次緊急発掘調査報告書-』
- 明科町教育委員会 2002 『柴町遺跡-[子どもと大人の交流学習施設]建設に伴う緊急発掘調査-』
- 明科町教育委員会 2004 『上手屋敷遺跡第2次調査-町営住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書-』
- 明科町教育委員会 2005 『潮神明宮前遺跡Ⅱ-町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書-』
- 堀金村教育委員会 1988 『神沢遺跡・田多井古城下遺跡・そり表遺跡』
- 堀金村教育委員会 2005 『堀金小学校付近遺跡-小学校の下に埋もれていた平安時代のムラ-』

* 本号で掲載した写真等のうち、出所を明記していないものは安曇野市教育委員会蔵です。



上ノ山窯跡群出土円面硯

◆◆安曇野の古墳時代◆◆

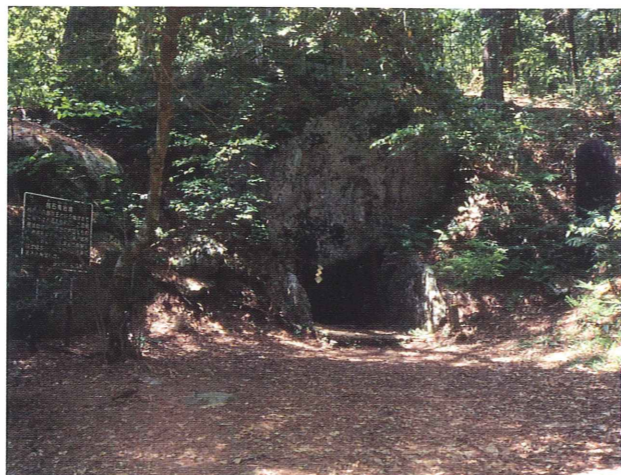
安曇野に古墳ができる 古墳は、人工的に土を盛り上げて作った墳丘をもつ高塚です。4世紀から6世紀には前方後円墳という大型の古墳が全国各地に築かれます。これらは、その地域一帯を支配した首長たちの権勢を民衆に知らしめたり儀礼のために造られたもので、地形を改変するような大土木工事でした。

安曇野では、6世紀後葉以降に円墳という小型の古墳が、堀金田多井から穂高牧・有明にかけての西山山麓、東山山麓にあたる明科中川手にたくさん築かれます。

穂高の古墳群 穂高の西山山麓には古墳時代後期に築かれた古墳が密集して分布しています。現在確認されているのは73基ですが、おそらく100基以上が、天満沢・富士尾沢など谷筋ごとにグループを作って分布していたと考えられます。下流に発見された藤塚遺跡など集落の生産(稲作)と大いに係わりあっていたことがうかがえます。また、出土した豊富な馬具からは、山麓に設置さ

れた牧(牧場)との関係もうかがうことができます。

潮神明宮前古墳 潮神明宮前古墳は、明科東川手の山麓、ちょうど会田川の右岸段丘上に分布しており、今までに8基の古墳が発見されています。このうち、平成10年に発掘された潮神明宮前1号墳は、20m四方の周溝をもつ方墳とみられており、多くの土器(須恵器)が出土しています。同じ頃築かれた近くの明科廃寺との関係が注目されます。



魏磯城窟古墳

◆◆安曇野の古代◆◆

安曇郡の四郷 平安時代に編纂された『倭名類聚抄』(現在の百科辞典にあたる書物)によれば、この地域は信濃国安曇郡にあたり、高家郷・八原郷・前科郷・村上郷の四郷が置かれていたことがわかります。四郷の位置は、古墳やその頃の集落が発見されている伝統的な地域、具体的には明科地域、穂高地域、池田町域、大町市域を中心に編成されていたものと考えられます。

沖積地の開発 一方、平安時代(今から約1200年前)に入ると、鳥羽遺跡・梶海渡遺跡・吉野町遺跡(いずれも豊科)、三角原遺跡(三郷温)、堀金小学校付近遺跡(堀金)など、今まで人が住んでいなかった地域にも集落が出現します。これらは扇状地の扇端や段丘端に位置しており、自然流や湧水等を利用して水田耕作・畑作などを営んでいたことが窺えます。吉野町遺跡や三角原遺跡では、鉄製の鎌や麻の皮から繊維を取り出す苧引鉄、糸を紡ぐための紡錘車などの道具も出土しています。

こうして安曇野の沖積地の開発が一気に進むのですが、これらの遺跡の多くは長く継続しません。吉野町遺跡や三角原遺跡で洪水の痕が確認されているように、未だ安定した生活域とはなっていないのでした。

この地域が安定した生活域になるのは中世になって鳥羽館・吉野町館(ともに豊科)などが築造されるようになってから、安定した生産域になるのは江戸時代になって勘左衛門堰や拾ヶ堰などが築かれてからといえます。



吉野町遺跡の竪穴建物
壁の中央にカマドが設けられている

土器づくりのムラ この頃、豊科田沢の山中には、土器づくりのムラ(上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群)が広がります。

昭和62年に行われた発掘調査では、須恵器と

いう焼き物を焼いた窯17基、竪穴建物(住居・工房)26棟などが発見されました。長野県下最大の窯群で、生産された土器は、松本平一円に供給されたと考えられています。また、硯や瓦、未だ集落址から出土例のない土器の出土などから、この頃、松本平に移庁したとされる信濃国府(今で言う長野県庁)とも密接に係わっていたことが明らかになっています。

仏教の広がり 仏教は古墳時代中ごろに日本に伝来し、地方でも国分寺建立以前から有力氏族によって受容されていました。明科中川手に発見された明科廃寺は、長野県内でも最も古い寺院の一つです。

また、集落遺跡でも鉢形土器や「寺」と書かれた土器が出土するなど、仏教的雰囲気広がっていきます。こうした信仰の背景には、単に利益を求めたばかりでなく、この時期進行した大開発や相次いだ自然災害に対する畏怖もあったことでしょう。



堀金小学校付近遺跡出土土墨書

コラム③ 鳥居龍蔵が見た安曇野の古墳

大正時代に安曇野を訪れた著名な考古学者鳥居龍蔵(1870~1953)は、その著書『有史以前の跡を尋ねて』(1925年)で、安曇野の古墳について次のように記しています。

豊科町より

今日は南安曇郡・有明村附近を調査しやうと思ひ、午前八時五分、大町から乗車した。同行は春日中学校長・渡邊南安曇郡視学・同太田郡誌編纂委員等です。

一行は先づ有明駅で下車、有明山神社附近の地に向て進みましたが、山麓に達する邊にある古墳の二三散在するを見ます。此處から以西の丘陵は所謂、塚原で、原始時代古墳の完全なるもの、既に発掘せられたもの、合して殆ど七八十許りあります。

(中略)

神社の境内は後と左右と三方に山を負ひ、一方は丘陵の端に低い土壁が築かれ、又或所には濠の様なものを掘った跡もあります。此社地から数町距った南の山麓に、古来、魏磯城(ギシキ)の窟と云ふものがあるが、私は此處に来て調べて見ると、之は古墳であるが、其構造は極めて面白いもので、多少自然を応用し、壁は石で組み其上の天井は一枚の大きな石で覆ふて居ります。這は固よ

り原始時代の古墳の一種たるは明かであるが、其の天井石を一枚の大きな石で覆ふて居るのは最も珍らしい。而して其石壁は石を横に積み重ねず、堅に樹て廻ぐらし、石槨の上には土が覆うて居る。・・・天井石は普通数枚の石で覆ひ、壁はまた石を横に積み重ねべき筈であるのに、此の古墳は之と反対であります。私は此の構造から見ると、ドルメンの一種(ストーンテーブル)と申す事が出来る様に思ふ。即ち少なくともドルメン式古墳の名称を附すべきものであります。一行は此處で祝部土器の破片一個を得た、斯んな珍らしい古墳は日本全国に於て、他に容易に見ることが出来ない。神社の西、中房川の溪流を渡って向ふの丘陵は、以上記しました古墳分布地帯で、私は是等の古墳の中、先づミササギ塚・ジジガ塚などを見ましたが、其構造はいづれも殆ど其形状は細長い石槨の形式で、石の組み方などは丸い河原石を積み、天井は低く、諏訪地方のものと同様相異する所があります。是等は尤に注意すべき事でありませう。(後略)

コラム④ 里山の植生変化

上ノ山窯跡群では、燃料となった炭化材の分析、谷に堆積した花粉化石の分析などから、次のような植生の変化が明らかになっています。

窯が築かれる前、東山一帯は主にクスギ・ナラなどからなる落葉広葉樹の山林が広がっていました。その後、須恵器生産が始まると、燃料として森林が伐採されます。こうして開かれた空間では、ソバの栽培も行われました。しかし、窯群の終焉とともに荒地が広がり、やがてアカマツの二次林が形成されました。

現在、東山で見ることができるアカマツ林は、自然豊かな素晴らしい林です。しかし、この自然も、人間が手を加えた結果もたらされたものであることを記憶しておかなければいけないでしょう。



上ノ山窯跡群の須恵器窯

◆◆埋蔵文化財と私たち◆◆

安曇野で行われた発掘調査の成果をごくごく簡単に紹介してきました。本号で紹介したことは、大昔の安曇野のことです。でも、つい最近明らかになったばかりの最新の安曇野の姿でもあります。

私たち人間は、他の動物と違って「モノ」を用い環境（自然）に働きかけることによって現代の生活文化を築いてきました。その「モノ」から現代の生活を見てみると、遺跡から出土した何百年も前の「モノ」と、つい数十年前まで私たちの身近にあった「モノ」とは大差ないことに気づきます。生活が大きく変わったのは、ここ数十年のことで、しかもそのスピードはかつて経験したことのない急激なものであることがわかります。

紹介してきたように、安曇野には何千年も前から人々の暮らしがありました。彼らは、都の人々や為政者（政治を行う人）のように、歴史の表舞台には登場しません。しかし、私たちは間違いなく彼らの築いた基盤の上に生活しています。何千年も前の彼らと現代の私たちは決して無縁ではないでしょう。



調査成果を市民に 三角原遺跡現地説明会にて

また、急激な変化の中にいる私たちは、今いる位置を見失わないようにしなければいけません。そのためには、私たちはもっとも過去の人々の営為を認識し、そしてその中から未来に向けての指針を得ていく必要があります。遺跡や遺物（埋蔵文化財）は、その手がかりを具体的に示してくれています。これら身近な「文化財」とそれを取り巻く環境を将来に生かし、そして伝えていくこと、このことは現代に生きる私たちの責務といえるでしょう。

◇◇訂正◇◇ 「ふるさと安曇野きのうきょうあした」NO.1のP4 コラム中の写真のキャプションで、「細萱鬼ヶ窟」とあるのは、「新田鬼ヶ窟」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

コラム⑤ 遺跡・遺構・遺物・発掘調査

考古学がその対象とする「遺跡」には、人々の住んだ村や都市の跡、城の跡、寺やお墓の跡、陶器や瓦の窯場の跡、水田の跡など、ありとあらゆる人間活動の跡が含まれます。そして、一軒一軒の家の跡や、穴の一つ一つ、つまり遺跡を構成する不動産（動かすことのできないもの）的なものを「遺構」と呼んでいます。「遺物」とはこれらから出土するもので、人間がさまざまな目的のために製作し使用した道具、すなわち容器、装身具、武器など遺跡を構成する動産的なものを指しています。原料や製作途中の未成品、食料とした動植物の残りかすなども含まれます。

遺跡は長い年月の間にさまざまな自然現象（時には人間の行為）によって土に埋まっており、なかなか全体像がつかみにくいという特質をもっています。こうした遺跡から情報を引き出す作業の一つが発掘調査です。発掘は調査目的と計画に従いながら、まさに土と対話するように進められます。移植ゴテ・竹ベラなどを用い堆積した土を取り除き、同時に記録（実測・写真・観察記録など）も欠かさず作成していきます。どんなに素晴らしい「遺物」であっても、それが「遺構」とどういう関係であったかが明らかになって、はじめて考古資料としての価値をもつからです。得られた遺物と諸記録は、室内に持ち帰って整理し、検討が行われます。調査遺跡の歴史的意義の考察はこうした作業を経て可能になります。

テレビや新聞紙上を賑わす新しい発見。その裏側では、このような地道な作業と情報の蓄積が続けられているのです。

◆◆編集後記◆◆

今号は、安曇野市内で行われてきた発掘調査成果にスポットを当ててみました。あらためて、市内で多くの調査が行われ、多くの知見が得られてきたことを知ることができました。一方で、その成果が市民に十分還元されていないのではという思いも強くしました。今号がいくらかでも「きのう」から「きょう」「あした」を見つめ直すヒントになれば幸いです。（Y）

編集 安曇野市豊科郷土博物館
発行 財団法人豊科文化財団
安曇野市豊科郷土博物館
〒399-8205 長野県安曇野市豊科4289-8
TEL・FAX 0263-72-5672
URL: <http://toyohaku.jugem.jp/>
発行日 2008年10月18日